

塚本義夫大 名譽教授

に聞く

草創期の保健体育

聞き手

河野仁昭

草創期の保健体育スタッフ

——体育の関係では、亡くなられた田淵潔先生に、このインタビューでお話をうかがったことがあるのですが、田淵先生が同志社へ来られる前から、塚本先生は教員として同志社大学におられたんですね。

塚本 そうでした。昭和二十五年四月からです。

——すると新制大学になって二年目。教養学部だったころですね。

塚本 そうそう。

——体育が大学の必修科目になるのは新制大学発足と同時だから、先生が来られる前から担当者がいたわけでしょう。

塚本 いました。塚本簞之助といって、私の父の従兄弟でしたね。保健体育が正課になるというので、呼ばれて教授になりました。

——簞之助先生も同志社のご出身ですか。

塚本 大学の英文科です。在学中は陸上競技をやっていました。確か田畑忍先生などと同じころに在学し、卒業したはずですよ。

——塚本先生は簞之助先生に呼ばれて同志

社へ？

塚本 私は昭和十八年九月に大学法学部経済学科を卒業して、兵隊にとられて満州へやられていましたね。終戦のときそこでソ連の捕虜になってバイカル湖近くの収容所へ連れて行かれたんです。

——そうでしたか。全然知りませんでした。が、よくご無事で……。

塚本 なんとかまあ命拾いをして、昭和二十二年八月に舞鶴へ帰りついて、体をこわしていました。祖父が建てた下鴨の東林庵（昭和二十四年五月、谷崎潤一郎に譲渡。現在は日新電気株式会社ゲスト・ハウス石村亭）で静養しましたね。健康が快復してから塚本商店電気部の役員の仕事をしていました。

——じゃあ、同志社からの話は予想していなかったわけですね。

塚本 そりアもう、全然。実は簞之助が同志社の体育実技にバスケット・ボールを採り入れたいということで、当時、京都のバスケット・ボール協会の会長をしていた遊津（のち、ナショナル電気労働担当重役）さんに、適当な指導者を紹介してもらえぬかと頼みに行ったんです。すると遊津さんが、「塚本さ



塚本義夫名譽教授

ん、灯台下暗しや」といって(笑)。簾之助の家は塚本の分家で、寺町二条の私の家のすぐ近くなんですよ。ともかく遊津さんが私を推薦してくれたわけですね。

私も仕事がありますからね、週に一回か二回、非常勤でなら行ってもええというわけで。——最初は非常勤で。

塚本 そうです。二十五年の八月に専任講師になりましたけれども。

——そのころの体育の先生は、簾之助先生のほかに……。

塚本 私と、私の家内(山下好子)、それから瀬口彰先生ぐらいです。戸川治之先生(英語担当)がテニスの実技を担当しておられました。ちよつと遅れて渡辺敏一君、日体大出身の倉敷(当時は石田)千稔君、まアそういう

ったところですよ。事務は塩谷さんという人と内海(旧姓・吉田)とし子さんのお二人で。

——田淵潔先生も早かったですね。

塚本 早かったですね。私が同志社へ行った二十五年の七月末に、簾之助は実技の学生を連れて夏山登山に行つたんです。そのとき具合が悪くなって、山へは登らないで帰つてきた。そして診察を受けたら癌やということ……。その年の十月に亡くなりましたね。

——じゃア、末期だったんですね。

塚本 そうです。健康だったので、あまり自分の体には注意していなかったようです。亡くなります前に、「あと困るやろから、田淵君に頼んだらどうや。京都へ帰りたい言うところから」言いましたね。田淵先生も簾之助も陸上競技部やつたし、下鴨の東林庵に長いこといっしょに住んでいたこともあって仲間やつたわけですよ。

——田淵先生は神戸市役所の保健局かなにかにおられたんでしょう。

塚本 そうそう。お願いに行つたら、ご子息の進学時期だったので、それがうまくいつたら同志社へ行きたいといわれて。昭和二十六年に来ていただいたと思います。

——体育担当の先生の採用で、特にむずかしい問題といったことはなかったですか。

塚本 むずかしいというのの意味が違いますが、田畑学長のとき倉敷君を専任講師としてのこすについて、わたしたちを含めて、自分を「体育専任講師」とすると、学事課長からいわれましてね。私も瀬口さんも「専任講師」で辞令をすでもらっていたんです。それで、今後の採用などにも問題が生じるからと、田淵先生に理由を聞きに行っていたんです。

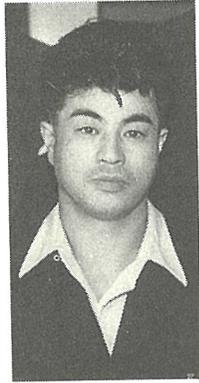
——いんですが、いっこうに要領を得ない。それで、私と瀬口さんが田畑学長に面会を申し込んで、意見を申し上げたんです。すると、「塚本君、君は恩師をいじめめるのですか、これはヴァラエティーです」と言われて(笑)。

——なんですか、「ヴァラエティー」というのは。

塚本 ようわかりません(笑)。でもまア、結局は「体育」というのはつけられないことになつて……。そんなことがありました。

不備だった体育施設

——簾之助先生、塚本先生、瀬口先生、田



若き日の塚本篤之助教授

淵先生などが、同志社大学正課体育の草分け
というか、基礎を礎かれたわけですが、体育
施設はどうだったんですか。事務室とか研究
室はどこにあったんですか。

塚本 最初は有終館の二階の奥でしたわ。
泰山捨蔵という課長がいた学事課の部屋に同
居で。

——いまの大学長室ですね、たしか。
塚本 そうなりますか。それから有終館の
一階にあった電話交換室が移転したので、そ
のあとへ移って、しばらくのちに、致遠館一
階の、今の出納課の事務室……。

——あそこ、学生部だったでしょう。

塚本 学生部と同居ですわ。それから中学
校のいまの体育館の西側に、千田（民衛）さ
んが辞められるとき置土産やいうて、一階が
体育課の事務室、二階が卓球場という木造の
建物を造って下さいましてね。

——やっと専用の施設で（笑）。事務所もな
んですけど、実技の施設がなかったんやない
ですか。体育館もないし。

塚本 中学校にはありましたが、しょ
つちゅう授業で使っているから。グラウンド
の北側に体育施設が若干あって、あとからバ
スケット、テニス、バレーなどのコートをつ
くりましてね。

——京都御所のグラウンドは、いつごろか
ら使わしてもらったんですか。

塚本 最初からですよ、学内にはああい
うグラウンドがないんやから。（笑）

——御所のおかげで助かりましたねえ。

（笑）それにしても、設備なしに正課で授業を
始めるといのは、いい時代というべきか。

（笑）

塚本 困るのは雨の日ですわ、全部野外や
からね。出来る種目はなんにもないわけです
よ。そういうとき、教室を臨時に使わしても
らえるかというと、そんな余裕はありませんし
ね。休講にするしか手がなかった。

——有隣館が出来てまもないころでし
ょう、明德館も完全には出来上っていない。

塚本 保健体育に限らず、大学の施設は全
般に不十分でしたからね。

——学外では京都御所のグラウンド以外に
借りたところはなかったんですか。

塚本 ありました、岡崎のスケート場。

——アリーナ？ 岡崎アリーナでしたか。

塚本 岡崎のアリーナ。黒磯というオーナ
ーが同志社の馬術部だったかのOBでして
ね、そこも長い間お世話になりました。営業
に横尾という方がおられていろいろ面倒を見
てくれていますね、アリーナがなくなるまで間
借りのような具合で。岡崎がなくなつてから
は高野アリーナでお世話になっていました。

——言い方は悪いですけど、スケートは一度に
沢山の学生の実技が出来るわけですよ。

——指導の先生は？

塚本 私とか。（笑）

——先生はバスケットでしょうが。

塚本 なんでもやるのが好やから（笑）。ス
キーとか。私の学生時分に河原町三条下ル一
筋目のところにアイス・スケート場がありま
してね、そこでフィギュアだけでなしに、
アイス・ホッケーの試合なんかもやっていた
んです。友達にフィギュアをやっているの
がいて、そいつの靴を十円だったか譲って

もらいましたね、滑りに通っていたんですわ。だから滑るぐらいいなことは出来たんです。でもむずかしいことは、アイス・スケートのフイギュアアの選手に助手を頼みまして、学生のコーチをしてもらいました。

——アイス・スケートなんてものは、一年間の授業で滑れるようになるものですか。

塚本 なります。学生は若いですから、覚えるのが早いですよ。

——実技の登録とか、時間割編成が大変だったんじゃないですか。

塚本 時間割などの基礎をつくったのは簾之助でしてね、当時は三シーズン制でした。

——と申しますと……。

塚本 春のスポーツ、夏のスポーツ、冬のスポーツです。三つに分けてそれぞれ登録せんらん。ほかに校外コースがあつて、それも登録せんらんわけで、学生数が多いし大変でした。それで、二年ぐらいたつてからだつたと思いますけど、シーズンを通しての登録に変えたわけです。

——夏シーズンのスポーツというのは、水泳ですか。

塚本 いや、夏山登山です。

——京都の北山とか。

塚本 いやいや、信州の山とか。有名な山はほとんど登つたと思います。そして冬はやはり信州へスキーに行くことにしていました。

——交通事情がわるかつたでしょうに。

塚本 そりゃひどいものでした。学生たちは列車の通路に寝ましたりね。

——簾之助先生は長時間、満員列車で夏山に同行して体調を崩された？

塚本 そうです。

——ほかに、いまはやっていない実技種目がありましたか。

塚本 アメリカン・フットボールにルールが似ていて、あんなにきつくないタッチフットボールというのがありました。大学時代にアメリカンをやっていた伊藤さんが非常勤で教えにきてくれました。

——実技全般についてですが、当時のことですからトレパンなんでものなかつたでしょう。

塚本 いや、それが案外でした。かなりの学生が持っていましたよ。体育実技を受ける学生には、準備しておくようにと、わりと

やかましく注意したからでもあつたと思いますけどね。「同志社はどんなふうに行っているんですか」と、学会で尋ねられたり、よその大学から見学に来たりしました。

保健体育の授業

——初期の保健理論や体育理論は、どんな先生が担当しておられたんですか。

塚本 最初は塚本簾之助が英文科出身でしたから、英文の原書を使って、オリンピックの歴史などをやっていました。簾之助が亡くなりましてからは、田淵潔先生が来て下さつて体育理論の講義を担当されました。

——保健理論はたしか、厚生館診療所の安藤（唯一）先生で……。

塚本 そうです。安藤先生にお頼みして。それから今出川室町下ルに豊田医院という病院がありましたね、その豊田先生にもお願いして。ええおじいさんでしたけど。よその大学の先生にも来ていただくとか。保健理論はいまもそうですけど、ずっとお医者さんにやっていただいています。

——田淵先生のあとは塚本先生が体育理論

を引き継がれて……。

塚本 そうです、瀬口先生とかね。体育実技を教えている間に、皆それぞれ勉強もしますしね。私なども体育生理学についてもやらんならんとするので、京都大学の田村先生とこへ行つて、「生理学を教えてください」(笑)、そういうで頼んで教えていただいたりね。

私は府立一中出身なんで、友達に医者の方がりに多いんです。それで教えてもらうのに都合がよかつた。

——体育の授業というのは、基本的には健康の維持増進ということが目的になるんですよか。記録を伸ばすための運動理論というものももちろんあるでしょうし、テレビで見ることもありますけど、一般の大学生に対してはどうかなと……。

塚本 健康というものは、自分でつくり出すもの、自分がクリエイトするものだということを理解してもらふことですね。

健康管理に関しては私たちにも関係がありますから。二十七年前に京大の浜田総長の提唱で、京大生の間接撮影を実施していただいたとか、保健センターが京大、東大、島根大学などにつくられるとか。それから全国大学

保健管理協会が、学生を対象に情報を提供するようになったのが二十五年前です。エイズ定期検診なども毎年やるべきでしょうね、潜伏期間が数年間ありますから。

——体育や保健の先生方の活動分野は広いんですね。

塚本 そうです。それから健康の問題のほかに、いま出産率の低下が問題になっていましてわなア。

——そうですね。

塚本 子供が少ない、だから親やまわりの者が大事にしすぎる。その点にも問題がありますしね。さらに、その結果として国や社会に活力がなくなつてくるし、高齢者の比率がどんどん高くなる。私など門外漢から、どうしたらええか具体的な施策などわかりませんけどね、このまま放置しておいてええこととは思いませんね。民族の若返りをどうやってはかるか……。

——本当にそうですね。それから、市民スポーツとか、健康増進とかレクリエーションとしてのスポーツ。最近ずいぶん盛んになってきているようですね。

塚本 その問題は同志社では瀬口先生が熱

心にやってみました。大学の体育は一流のスポーツ選手を育てるためのものではなくて、リベラル・アーツの一環としての体育ですからね。

——なるほど、アーモスト大学が体育を正課にとり入れたのは、ずいぶん早いことなのでしょうが、リベラル・アーツと関係があるかもしれませんね。

新町校地の購入と体育施設

——ところで、貧弱だった体育施設が、少し充実してくるのは、新町校地を昭和三十四年に大学が購入する。あれからでしょうか。

塚本 そうです。あの新町校地、隣接する第一従規館の所、そして新町通今山川を下ったところのプールや第二従規館がある所、みな日本電池の旧本社、工場、食堂、クラブなどがあつた場所ですわ。日本電池はそこが手狭になつたもんやから、西大路八条、九条の方へ移転して、今出川工場は建物など全部そのまま放つてありましてね。浮津さんという人が残つて管理していました。

——えらいお詳しいですね。(笑)

塚本 実は私、大学卒業と同時に日本電池に入社して勤めていましたんや。(笑)

——詳しいはずや。(笑)

塚本 勤めていた言いましても、招集で入隊せんならんことになったので、一カ月余りですけどね。

私が同志社大学の教員をしていることを知っていた浮津さんが来ましてね、「あの土地、早う売りたいんや」と言うわけですよ。その後まもなく、日本電池の秘書課長さんが来まして、「同志社に買ってもらうわけにいきまへんやろか」と言いましてね。

それで私は、同志社の秦孝次郎理事長さんに、日本電池の意思をお伝えしたわけですわ。

——そうだったんですか。

塚本 私の父純一も同志社出身で、秦さんと同級生だったので、よう知ってくれてはったんやね。ところが、日本電池からは再三再四催促があるのに、理事会はなかなか決めんもんやから、「同志社はのんびりしてますので、なかなか決まらんですわ」というような返事をしたことを覚えています。私は話のとりつきだけで手を引きましたけどね。

——その新町校舎は同志社が購入してから

もしばらくの間、日本社(現・臨光館)以外は工場の建物のままでしたね。

塚本 そのまま使いましたからね。いま自動車部のガレージになっている所の横手にあった建物を、ちよつと手直ししただけで体育館にしましてね。

——初めての体育館(笑)。覚えています。

塚本 やつと雨が降っても授業がやれるようになつたわけですよ(笑)。あそこが一段高くなつていきますので、「低い方はグラウンドにしてもらえませんか」と大学にお願いしたんですけどね、教室が足りないからあかんと言われましたわ。

——低い方を整理して尋真館が昭和三十七年に建つたわけですね。

塚本 そうです、上野(直蔵)先生が学長だったときです。それから隣接地の日本電池の食堂があつたところに第一従規館、クラブ・ハウスがあつたところに第二従規館ができました。

——岩倉へもつくりましたね。

塚本 従規館のあとで。

——岩倉も授業に使っていたんですか。

塚本 使いました。それから、上野学長の

ことで思い出したんですが、体育の研究室や事務所が聚芳館(昭和四十七年解体)に移転していたころ、全国的に体育生理学の研究が盛んになりましたね。私学の研究設備助成金で必要な実験機械器具を購入することができるところを知りまして、上野学長が非常に親しくしておられた慈恵医大の樋口学長を、先生に紹介状をいただいてお訪ねしたんです。体育課の時岡直一さんが一緒でした。

樋口学長にお会いしていろいろお話ししたら、「何がほしいんですか」「よろしい、上野さんよろしくな」(笑)、という調子で、即座にトレッドミルその他の実験用具の助成を割り当てて下さいましてね。

——人脈のしからしむるところですか(笑)。新町校地の利用も含めて、体育が充実するのは、そうしますと昭和三十年代の後半から、四十年代の前半ですね。体育以外の施設もまあ大体そうですね、新町校地の購入が大きかったです。

大学紛争のころ

——私、法学部の教務係を昭和三十三年か



今井仙一先生

ら、たしか三十九年までやったんです。そのあと十年ほど学生部で。私が法学部にいたころ塚本先生は教務主任をなさっていましたね。いろいろお世話になったので覚えてます。

塚本 教養学部が解散して、六学部タテ割りになったでしょう、昭和二十六年に。そのとき体育担当者はみな経済学部所属になったんです。

——どうしてですか。

塚本 どうしてかは知りません(笑)。その翌年、私は法学部へ異動になりました。そして今井仙一先生が学部長になられたとき、「君、教務主任やってくれ」いわれましてね。

今井先生は予科時代の恩師です。「私は体育のことしかわかりませんから」と辞退したんですけど、「それでええんや」というわけですね。

今井先生は実にいい方で、学部の全体の教授会がまずあって、それがすむと専門部会。一般教育の担当者は帰ってもいいわけですよ。すると今井先生が、「塚本君、これからなにか用があるんですか」といわれるから、「いいえ、なにも」「そしたら部長室で待つとつてんか」。

——教授会のあとの処理とか。

塚本 ちがいますがな、二次会です。(笑)

——思い出しました。

塚本 それから間もなく大学紛争でしょう。

——先生はたしか学生主任をなさっておられましたね。

塚本 そうなんですよ(笑)。なにというとお役に立ったわけやないですけども、寮が問題やいうことで、私、大成寮へ寮生と話をしに行きました。そしたら寮生がびっくりして、「学生主任が寮へ来たんは先生が初めてや」(笑)。ええ経験さしてもらいました。

——そりやそうでしょう。

塚本 行きましたね、けんかもしましたけど、わかりあえるというのか、彼らが卒業してからも親しくしていますよ。私が定年で退職(昭和六十年三月)しましたとき、「先生、定年になりましたんやろ、祝うてあげる」言っていますね。それから、私が三年前に古稀になったときも、「先生、古稀のお祝してあげるさかい、出て来て下さい」と、祝いの宴会をもってくださいましたね。

——紛争のとんだ副産物ですねえ(笑)。先生ぐらいでしょう、寮生のOBから古稀の祝いまでしてもらえるの。

塚本 十人ほどですけどね、立派になっていきますわ、特に情水征樹君とか畑安次君、そのほか行政監察庁にいるのとか、朝日新聞社の支局長だとか、ヤンマーの人事部長、婦人の会社の人事部長、兄貴が代議士で、その秘書をしている男だとか。

——皆さん立派になっていりますねえ。考えてみたら、あれから二十年以上たっているんですものねえ。

塚本 私らもね、考えてみたらけっこう彼らの世話になっていますよ。



大学予科生ころの仲間たち（左より・塚本、寺嶋、辻本、安原）

学生時代の恩師と友人たち

——話が前後してしまいましたけれども、

府立一中から同志社大学へ入った人は、先生のほかに何人かいるでしょう。

塚本 います。亡くなった滝川春雄君、法学部の恒藤武二先生、経済学部の岩根達雄先生、神学部の遠藤彰先生。それから工学部にいて早く亡くなりましたけど里見という先生とか。

——たくさんいらつしやるんですね。鍾々たる先生方ばかり……。滝川先生は法学部に残っておられたでしょう。

塚本 そうです。私が同志社の教員になると同時に、大阪大学へ移られました。

——大学時代の先生にはどんな方が……。

塚本 予科では山田貞夫先生、戦後、同志社高校の校長、そして香里中高の校長にいられた方です。それから今井仙一先生、速水藤助先生、林源三郎先生、倫理学の二宮源兵衛先生、フランス語の加藤美雄先生。加藤先生はいまも大阪外国語大学においてになるようです。東洋史か日本史が田中達男先生、それから牧茂市郎先生、自然科学やったかな。英語の浅野泰造先生、とにかくいろんな先生に習いました。

——先生が予科へ入学されたのが昭和十四

年四月、十八年九月繰り上げ卒業となると、全くの戦時下ですねえ。

塚本 そうでした。

——軍国主義教育で、体罰があるとか、怖いようなことはなかったですか。私など当時四国の田舎町の中学でしたけど、学校へ行くのが怖かったものですが。

塚本 いや、けっこう面白かったですよ。

——大学生になれば紳士として扱うという校風があったからでしょうか。新島先生のことから、同志社はあまり締めつけのようなことはしなかったですから。

塚本 校風かどうか、かなり自由やったし、したいことをしましたなア。授業で印象に残っていることの一つは、今井先生の授業がむずかしかったこと……。

——哲学でしょう。(笑)

塚本 そうです。それから二宮先生の倫理学、これが眠うて眠うて(笑)。でも今井先生には随分お世話になりましたけどね。

とにかく、私はなんでもやってみることが好きで、スポーツもやりましたけど、フランス語クラスでしたから、大倉商事の会長になった岸本謹之助君に励められて、日仏学館へ



全学対抗ボート・レース優勝（優勝旗は「いしかね」の歌）

フランス語を習いに通ったりしました。これはバスケットの練習がおそくなりますので、一年余りで止めて、ものにはなりませんでしたが、それだけでも。

——戦時下にしてはかなり自由があったみたいですね。

塚本 まあ、そう言ってええと思います。それから、友達に何人か朝鮮人学生がいます。

した。金鐘錠、金寛沫、それから鄭コーケン。鄭は途中で止めましたけどバスケットの仲間でした。朝鮮からやと当時は国許からなかなか金が届かんもんやから、鐘錠は藤田の洋服屋でよく借金してましてね。金を送って来たらちゃんと言返すんですけど、余りたびたび行くもんやから行きにくくなって、「塚本君、頼みに行つてくれよ」（笑）。そんな仲間でした。合宿なども一緒に。

私は満州の新京で捕虜になるとき、よっぽど金がある京城まで逃げようかと思いましたが。どう考えてもあんまり速いもんやから、逃げて行くのを諦めて捕虜になった。（笑）

——その人たちから消息ありますか。

塚本 金鐘錠は朝鮮戦争のとき死にました。金寛沫は牧師になって、女子高校の校長などもしていていますね。先おとどしだったかバスケットの実年OB会（五十歳以上）に出たきまして、鐘錠のことを尋ねたら、死んだと……。ええ男やつたんですけどね。

学生時代のスポーツ活動

——先生は学生時代にバスケットの選手だ

ただですけど、戦時下やからということ廃止された部などはなかったですか。

塚本 そんなことはありません。私たちの学生時代にスキー部とフェンシング部が新設されましたしね。ただ、英語の名前は使わなくなつて、籠球とか蹴球とか言いました。しかし、ラグビーはやっぱりラグビー言うてましたな。

——日本語に変えられないからでしょうね。

塚本 今出川校地から新町校地へ行く途中の室町通りの角にお風呂屋さんがあるでしょう。

——はア、今もやってますけど。

塚本 あの風呂屋で、バスケットとラグビーは練習のあと、入浴して着替えるんですわ。そして着替えた練習着を天井からいっぱいぶら下げて乾かしとくんです。（笑）

——いつも？

塚本 そうです。それから藤田の洋服屋へどかどかっと思ひまして、そこが溜り場です。

——学校近辺の人たちは、学生を可愛がってくれたんですね。

塚本 植物園のグラウンドが陸上部の練習



滝野ミツ子さん（後列左）たちと（前列右端・塚本）

場になってましてね。彼らは練習から帰りに下鴨の私の家へ寄るんですわ、晩ご飯をたべに。(笑)

——人数が多いでしょうに。

塚本 多い上によく食べよって。(笑)

——むかしの学生は、そういう点は恵まれていたなアと思いますね。風呂屋さん、藤田洋服店、和田靴店、塚本先生のお宅。下宿とかいろいろ親切に下さるお宅や店が、学校の周辺にあったやろ思いますね。

ところで、先生はスケートやスキーもされ

たんですね。正課体育で教えはったぐらいですから。(笑)

塚本 教えるというほどではないけどね(笑)。スケートは先ほと言った河原町三条下ったスケート場。スキーもあちこちへ行きました。家族と行ったたり、友達と行ったたり。

——信州とか。

塚本 そうです。経済学部で滝野ミツ子という先生がおられたでしょう。あの先生は北海道出身で、スキーがお上手だったので、志賀高原まで一緒したことがあります。ミツ子先生の弟さんが私と同級で、これも上手でした。

——当時は、北海道くらいしか、スキーは一般化していなかったんところがいますか。

塚本 滝野姉弟は北海道でやっていましたからね。花背で校内スキー大会というのがありますね。十人ぐらい出ましたが、滝野弟が一位、私が直滑降もスラロームもみな二位。

——ボートの校内大会も瀬田川でありましてね。私たちの組が優勝しました。それから、立教大学とのバスケットの定期戦。立教は日本人の選手は一人で、あとはみな韓国人学生が選手でした。

——韓国は強いんでしょう。

塚本 強いんです。創部五十周年のとき韓国へかなりいいメンバーを揃えて行きましたけど、一勝も出来ませんでした。

保健体育教育への希望

——最後になりましたけど、大学設置基準が改正されて、保健体育科目につきましてもいろいろ検討されているようですが、今後のあり方についてなにか。

塚本 さっきもちょっと申しましたように、人間にとって大切なことは、健康というもの。各人が自分でクリエートするものなんです。ですからそうした健康に対する認識というか、健康学というものが日本人の常識になっているとすれば、私はかならずしも必修でなくてもいいと思います。

——そういう前提のもとにならね。

塚本 在職中の経験から申しまして、学者というのは一般的に言って、スポーツ、音楽、芸術といった感性的な世界には余りはいりたがりません。だからそういう方たちの理解を得にくいという問題が、いまだにありますし

ね。

でも、必修からはずしても、あの田辺校地の立派な体育施設をフルに使って、それぞれ好きな種目をやってみようという学生は、おそらくたくさんいると思いますよ。

——選手になるとかでなしに。

塚本　そうです。スポーツ人口は私たちの学生時分から比べたらものすごくふえてきていますしね。スポーツを楽しみながら自分の健康づくりをする。そういう方向での施設を使ってもらい、指導もするといった具合にね。

——どうも長時間にわたってありがとうございました。

(一九九二年一月十三日、塚本義夫名誉教授宅にて収録)

お詫びと訂正

九十二号インタビュー・ルーム

遠藤汪吉大学名誉教授に聞く

一三四頁 上段 五行目、六行目

……それで学生時代には真言宗に……↓

……真言宗……

中段八行目

——真言宗も……↓真言宗も……

『同志社百年史』について

「通史編」(全二巻)

同志社百年の歴史を五つに時代区分し、次の五部から成っている。

第一部 創業と成育(明治前半期)

第二部 キリスト教教育の受難(明治後半期)

第三部 大学への道(大正期)

第四部 戦時下の学府(昭和前半期)

第五部 再生と発展(昭和後半期)

上野直蔵総長は「通史編」の「序」で、「同志社における徳育の基礎であるキリスト教は、それがキリスト教たるがゆえに、少なくとも一九四五年にいたるまで国粹的権威筋から胡乱な目でみられ、疑問視され、敵視されてきた。(中略)

同志社を護るための先人たちのすさまじいまでの攻防は、まさに一つのドラマであり、読むものをして緊張と畏怖の念を起させるであろう。この書は同志社の犯した数々の失敗や恥辱の部分をも隠すことなく記している。」と述べておられる。ラットランドのグレイス教会における新島襄の、学校設立に関する訴えを起点とする「通史編」は、確かに、キリス

ト教主義をめぐる同志社の攻防を軸に展開されているといえよう。もちろん同志社の諸制度や諸学校の変遷、そこで生きた学生生徒を含む諸先輩の動向などは、それぞれ独自に、読者に訴えるものをもつたはずである。

「資料編」(全二巻)

「通史編」の叙述に用いられた基礎資料およびそれに関連のあるものを中心に編纂されている。同志社開業関係にはじまり一九七五年度までの主要な資料を収録、原資料による同志社百年史といつてよく、それ自体自立性をもっている。収録資料三五〇点、従来活字になっていなかったもの、すなわち未公開資料が数多く含まれており、読者は同志社史の新しい一面を見出すであろう。研究者の期待にも応えうるものである。詳しい同志社年表を添えてある。

「通史編」一、六五八ページ。

掲載写真 三三五点

頒価・六〇〇〇円

「資料編」一、一九二ページ。

頒価・二〇〇〇円

発行・学校法人同志社
取扱い・同志社収益事業課
(☎〇七五二二五一一三〇三八)